本と地域の情報誌

県北 どらくろあ

第92号　2023年11月1日（毎月1日発行）

木次線（きすき）ストロール②
三井野原（みいのはら）駅
「スキーのゲレンデと道の駅 高天原（たかまがはら）にある駅」

10月16日月曜日、朝の8時過ぎに車で庄原の自宅を出た。朝霧の遠景が次第に晴れると、多くの田が稲刈りを終えて、短い草が生えている。

9時前に油木駅に到着。少し時間があるので、ホームを移動しながら周囲の写真を撮っていたら、足許のホームの砂利に黒っぽい小石がいくつも混じっているのに気づいた。拾い上げると、まさしく金糞、たたら製鉄の精製過程でできる鉄滓（てっさい）である。川から砂利を運んで来たのかもしれないが、この地方でたたら製鉄が盛んだった証左だろう。

9時35分発の木次行きの列車がホームに入って来た。黄色とピンクのツートンカラーの車両がかわいい。扉が自動で開くのを待ったが、そのままだったので、慌てて扉の横にあるドアボタンを押した。芸備線と同じジーゼル機関車のワンマンカーなのだが、扉が自動式ではないのである。待合室の壁の「お知らせ」によると、今年の3月のダイヤ改正時に、自動から手動に切り替えられたようだ。理由は書かれていない。

乗客はわたしを入れて7人ほどで、みんな旅行客の装い。深緑に囲まれた川沿いの線路を、さらに登りながら10分余りで三井野原駅に到着、わたしだけ降車。JR西日本では、最も標高の高い（727m）駅である。ちなみに、普通鉄道の日本一高所にある駅はJR東日本の長野県の小海線・野辺山駅（1345・67m）、八ヶ岳高原線と愛称されるだけあって、日本アルプスの地はスケールが違う。

2014年12月に改築されたという木製の駅舎はきれいで、トイレがシャワー式だったのには驚いた。障害者用のトイレも完備されている。

駅舎のホームに面した外壁には、神秘的な絵の看板に「高天原（たかまがはら）」の文字。この駅の愛称であるらしい。その隣の案内板に「日本神話では、天に高天原の世界があり、地に葦原中国、つまり出雲世界があります。素戔嗚尊（すさのおのみこと）は高天原から出雲の鳥上の峰（船通山）に天降り、八岐大蛇を退治されました。そして奇稲田姫を妻に迎えて出雲国を治め、幸せに暮らされました。」とある。つまり、この三井野原が高天原（の一部？）であり、下った出雲が人間の住む世界ということだろうか。

駅の近くに「稚児ケ池（ちごがいけ）神社」がある。神社の解説板によると、「三井野

木次線の車両はピンクと黄色

の地名は御生、御井で比婆山神話に由来し、此処にある稚児ケ池は古い信仰を持っている」。

その神話を要約すると、高天原には伊弉諾尊（いざなぎのみこと）と伊弉冊尊（いざなみのみこと）の二神が住んでいて、東方一里御井（三井野原）にある泉のほとりに産室を作り、三貴神（天照大神、月夜見神、須佐之男神）が誕生した。この泉はいかなる旱魃のときでも水減することなく、往古は伯耆大山や宍道湖とも底が通じていて大蛇がこの池に通っていたという言い伝えがある。しかし、周辺の地盤は軟弱で、ぬかるみに足を取られ溺死した者もあったので、埋め立てられて一坪ほどの池になった。その上に須佐之男命（すさのうのみこと）を祀る祠を建て、

今は稚児ケ池神社と呼ばれて隣国より水の神様として信仰を集めている。

実は、下調べて稚児ケ池神社のことが漏れていて、取材時に訪問＆参拝することができなかった。今まで書いたことは、「ウイル西城」のホームページに掲載されている内容を参照している。次回の木次線ストロールで、稚児ケ池神社をあらためて紹介したいと思っている。

三井野原は、スキー場として知られている。木次線開通時には駅は存在していなかった。ウィキペディアの記事によると、駅の開設のためにスキー場が計画されたという経緯があるようだ。スキー場建設と仮乗降場の建設がほぼ同時に進められ、昭和24年の開業も同時期。そして、昭和33年に正式な駅に格上げされた。

駅前の通りを奥出雲方面に進むと、右手の山の斜面にスロープとリフトが見える。オフシーズンなので、草や灌木に覆われている。スキー客用の宿泊施設が点在しているのだが、建物や看板がかなり傷んでいる。休業ではなく廃業？「貸しスキー」の文字が掠れている。かつてはみんな、列車でスキー場に来て、用具を借りて宿泊していた。今は自分のスキー用具を自家用車に詰め込んで、日帰りで通って来る。そのスキー客も年々減少している。

駅前通りを進むと、国道３１４号線に出る。しばらく歩くと「分水嶺７２７ｍ」の標識。手前が広島県の江の川水系、向こうが鳥取県の斐伊川水系となる。すぐ先に、稚児ケ池トンネル（三井野原高原トンネル）が口を開けている。全長は１１５ｍ、コンクリートに囲まれた現代的なトンネルの歩道を進んでいると、なんだか未来へのタイムトンネルを歩いているような気がする。逆に、古びたトンネルを歩いていると、過去へのタイムトンネルを歩いているような気分。未来に夢があるとは限らない……。

トンネルを出ると三井野大橋（写真上）で橋長は３９２ｍ、深い谷に掛けられた橋で、高所が苦手なわたしは、防護柵の下を見ることできずに、歩道の道路側を歩いた。それでも強風に吹かれると、谷底まで吹き飛ばされそうな恐怖を覚えた。

橋を渡った先に道の駅「奥出雲おろちループ」がある。少し早いが食堂の「出雲蕎麦」で昼食。併設されている「鉄の彫刻美術館」のレストランに入るつもりが、閉鎖されていた。たたら製鉄の里として、鋼鉄のモニュメント彫刻で著名な下田治氏の作品を展示した美術館。残念ながら、「作品点検中」で入場することはできなかった。

さすがは鉄の里だと思ったのは、道の駅の裏手に黒い除草シートが敷かれているのだが、その重しに拳ほどの石がばら撒いてある。よく見ると、その多くが金糞なのだ。どこで採石したかはわからないが、身近に転がっているのだろう。

国道３１４号線を引き返してさらに西進、県境を超えて油木駅を目指して歩いた。

山がつの家ひとつだにあらぬ野に
　だれとすみれの花やさくらむ

頼杏坪が「しほゆあみの記」で、国境の光景を詠んでいる。「山がつ」は木こりのこと。木こりの家一つない野原に、誰に見せることもないすみれの花が咲いている。今の県境の峠道にも家屋は見当たらない。アスファルトの歩道に、雑草が生い茂っているのには驚いた（写真下）。まず表面を厚い苔が覆い、そこに雑草が根を張る。自然の逞しさである。三井野原にはセイタカアワダチソウの姿はほとんどなく、ススキの白い穂波が揺れていた。

今月の3冊

どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「雑書放蕩記」

谷沢永一 著　新潮社

著者は関西大学文学部名誉教授、2011 年に 81 歳で逝去。「本は私にすべてのことを教えてくれた――。蒐書六十年、その数二十余万冊」、帯の言葉である。タイトルの「放蕩記」に共感、まさに耽溺したのである。

子供の頃の古本探訪のエピソードが楽しい。当時は大阪の町じゅう至る所に夜店が出ていた。古本業者も多く、莫蓙を敷いた僅かな面積に木の箱を並べ、背表紙だけ見せる。値段も安く、しゃがみこんでじっと眺める。本好きには堪らない光景ではないか。終戦後の古本屋の空前絶後の繁盛期、戦中に死蔵されていた膨大な古書が市場に出回った。古書と共に歩んだ自伝でもある。

「ひかりの魔女」

山本甲士 著　双葉文庫

突然、一緒に住むことになった 85 歳の祖母に、真崎家の家族は戦々恐々。とくに、自宅で大学浪人の光一は、自分が世話係にさせられるのではないかと迷惑がる。しかし、実際に暮らし始めたおばあちゃんは、自分の食事は自炊して、矍鑠としている。七輪での釜炊きのご飯や手製の糠漬け、小魚の甘露煮の素朴なおいしさに、光一は魅せられる。

書道教室を営んでいたおばあちゃんを、かつての教え子たちは、大人になった今でも慕っている。父親のリストラで荒んでいた真崎家の諸々の問題も、そうしたおばあちゃんの人脈と機転で解決。情けは人のためならず、ハッピィエンドが嬉しい。

「麒麟児」

冲方丁 著　角川文庫

幕末と明治維新の端境期で行われた「江戸城無血開城」を描いている。勝海舟と西郷隆盛という時代の麒麟児が、互いの陣営の複雑な利害関係を背負って、綱渡りのギリギリの折衝を行う。決裂すれば大江戸は戦場となり、兵士だけではなく市井の民にも甚大な被害が出る。

敗軍の交渉人としての海舟のタフ・ネゴシエーターぶりが圧巻。戦闘は回避したいと考えている西郷の心を見越して、少しでも幕府の有利な条件を得ようと奮闘する。時代背景も丹念に描かれていて、毀誉褒貶の激しい幕末の人物像をわかりやすく解説。圧巻の筆力で、直木賞も近い?

「ぐんぐん伸びよう会」　（教室：庄原市川西町 241　連絡先：080-3631-9125　やないたえこ）

0～2歳

どんなことでも吸収する時期です。さまざまな**言葉のシャワーをたっぷりと浴びせてあげましょう。**童謡を歌ってあげる、絵本を読み聞かせてあげる、いつも語りかけてあげる。**能力開発においては、黄金期**ですね。

無料体験学習受付中！！　お気軽に問い合わせてくださいね。　　対象者：0歳～小学6年生

文学探訪
庄原と「百三の青春」⑨
『出家とその弟子』と庄原―若き百三の投影を探る

音谷 健郎

何度日かに戯曲『出家とその弟子』を読み返しました。このシリーズで訪ね続けた倉田百三が、作品にどのように投影されているのだろうか、という関心からです。私の思い入れが加わることは、承知の上です。

作品を書き上げた「丹那」の地。
当時の面影がわずかに残る船だまりの
バス停「仁保4丁目」付近

ここで、思い出して貰うために『出家とその弟子』の多少の粗筋を紹介しておきます。この作品は、「序曲」と6幕からなり、「序曲」では、「人間」が現れて、生きることへの憧れと畏（おそ）れを告白します。

本編の1幕は、親鸞が2人の弟子を従え、ある百姓家に宿をお願いするが、きっぱり断られます。ですが主は悔いて、後を追おうとします。第2幕以下は、その15年後から始まります―。あの時に11歳だった少年は僧「唯圓」として親鸞に仕えています。

親鸞は悩みながら道を説き、名声が高まります。その様子も描かれます。第6幕の親鸞聖人臨終の時、唯圓が同伴してきた善鸞は枕元で罪を悔います。だが、親鸞聖人は「それでよいのじゃ。みな助かっているのじゃ」との言葉を残し、事切れます。

この作品は、百三が庄原の実家で書き始め、療養のため間借りしていた、広島市の東郊外、「丹那」という漁村の海辺の家で完成させたとされています。だが、妹艶子は、この作品は「国（庄原を指す）の自宅で書き上げてから国を出た。出てから少しは手を入れたかも知れないが」というのです。理由は、丹那では他の作品を書いていたというのです（『兄百三』）。

ここ「安芸郡丹保島村」から百三が発した手紙には、「丹那は淋しい漁村だが、温かく」いいとこだと記しています。でも、今はほとんどが工場の敷地となっていて、バス停「仁保4丁目」辺りにわずかに船だまりが残されているだけです。

この『出家とその弟子』は、どのページを読んでも、百三が求め続けている人生探求の独白に満ちています。青春の書と言えます。

全編を通じて、仏教とくに親鸞の教えが掘り下げられていますが、その時代に苦悶した愛への自問と思えます。その愛は、私の独善ですが、どうも神田晴子こと「お絹さん」との葛藤が投影されているように思えてならないのです。そう思うことで、この書が、うんと身近になります。

そこで、この作品を手がけた動機は何なのか、考えてみました。手がかりになるのは、大正3年から大正9年まで百三が一高の親友に出し続けた手紙を集めた『青春の息の痕』です。お絹さんのことが頻繁に出てくるからです。

まず、小説を書くとは、百三にとって、どのようなことだったのでしょうか。

「私は自分の生活を直ちに隣人に献（ささ）げたい。一つの芸術、一つの哲学として提出する才能はなくても、『生』を享（う）けたものは何とかして生きて行かねばならない」と。「与へられる素材をもって最も真摯に生きること」とも説明しています。

一高を中退した百三は、「この三年間に育って来た私の思想をまとめたい」、第一歩として書物として出したい、としています。だが第一歩の内実は、家出してきたり、2人でうろうろして警察沙汰になったお絹さんとのことでした。「私はお絹さんの運命に没交渉ではゐられません」と、お絹さんが「いとしく」なる一方、「あくがれてゐる宗教的生活を捨てることは出来ません」と、板挟みになります。親鸞の唯1人の子「善鸞」が放蕩息子として勘当されながら、遊

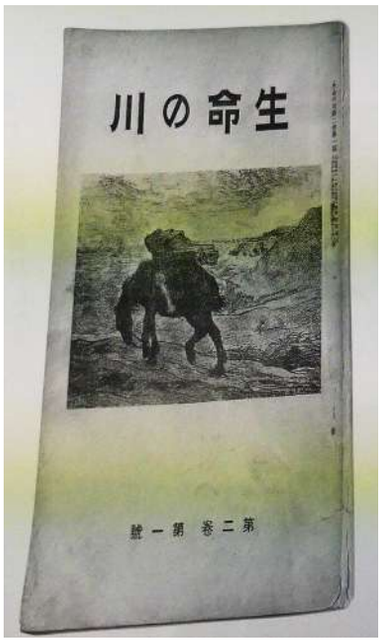
女「浅香」との関係を続ける姿とどうも似ています。

次に、百三が「私は自分で書きかき涙が出ました。そしてお絹さんとも一生別れずに仲よくせうと思ひました」と述懐していることです。そうだとすると、善鸞は、百三の内なる言葉を代弁していることになります。

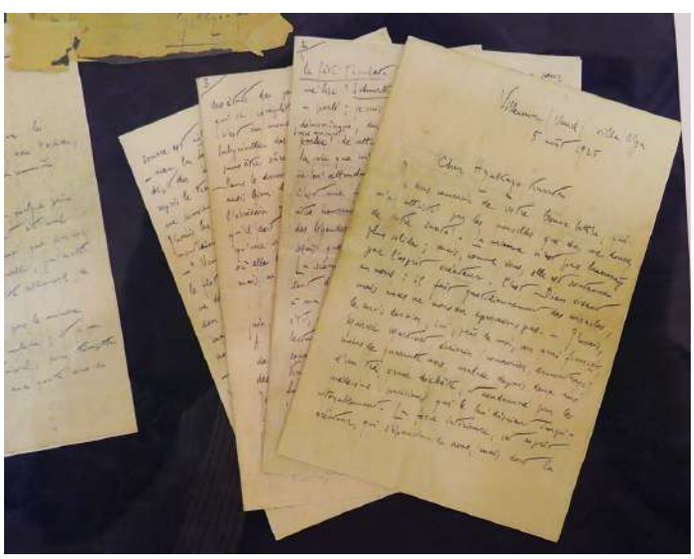
煩悩と放蕩三昧の「善鸞」が百三なら、お晴さんは「浅香」として展開します。少し突飛に見えるかもしれませんが、こう設定することで、百三が、自分の内なる何を解きほどこうとしているかが見えてくるように思えるのです。

これを裏付けるように、勘当された親鸞の子「善鸞」には遊女「浅香」が寄り添い、これも百三の分身のような求道者の唯圓に寄り添ったのは遊女「かえで」です。「かへで」はやがて出家して「勝信」となって自己救済し、作品は懺悔した善鸞ともどもハッピーエンドになっています。心根のやさしい百三にとって、この結末しかなかったと思えるのです。

最後に作品を通して、百三の宗教と信仰に対する深い知識がうかがえるので、これについても探ってみます。この作品を書き上げたのは大正5年夏、百三25歳の時です。学校を中退して3年目、社会経験はほとんどないままです。では、親鸞の仏教観を、どこで身につけたのでしょうか。その手がかりとして、病気で弱気になっている三次の伯父宗藤襄次郎に送った手紙があるので紹介します。日付からすると2人の姉の死の直後のようです。



『出家とその弟子』が掲載された文学誌「生命の川」
（『庄原市の歴史・通史編』）



ロマン・ローランから百三への激賞の手紙
（倉田百三文学館所蔵）

「此の火宅にも比すべき苦痛と不自由とに充ちたる世界から、あの阿弥陀経にあるやうな功徳荘厳の成就した浄い安楽世界に遷り住むことは、達人の眼より見れば日出度い本懐を遂ぐるといふものでありませう」。さらに「此の世のしばらくの肉体的苦痛さへ忍耐すれば後は花降り妙楽響く浄土に諸仏聖衆たちの間に伍して永久の幸福に与（くみす）ることが出来ると聞かして貰ってゐます」と。

なんと仏教の概念と用語を駆使しての励ましの言葉です。こういう蓄積の内に作品は展開していることを思い知らされます。宗藤家も倉田家も真宗の檀家総代だったことに思い至ります。

この書が、青春の書として爆発的に読まれた背景は、大正中期の青年が抱えていた憧れと苦悩、愛と挫折、世間への門出と怨嗟と言った課題が、暗喩のように描かれていたからではないでしょうか。封建的な家父長制度に鬱積を募らせていた大正青年の叫びの書なのではないでしょうか。

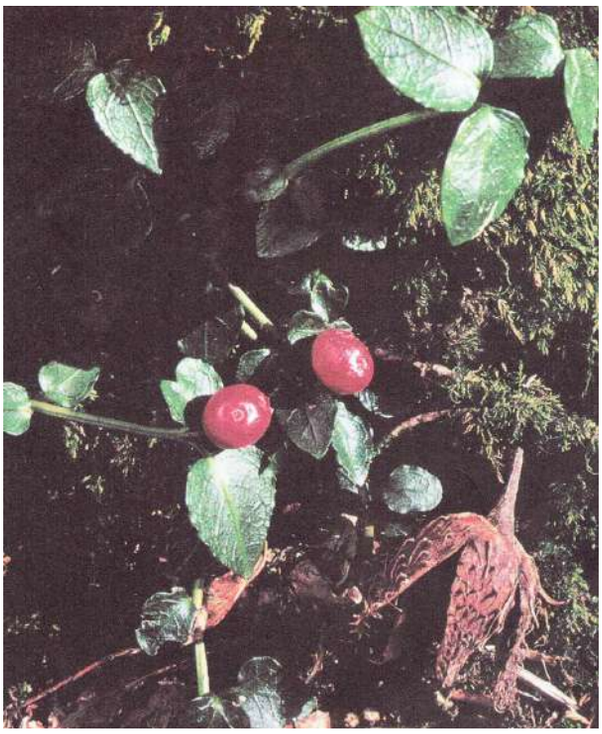
次回は、この『百三の旅』で「書き残した」事案を取り上げます。

虫と草木と人びとと㊽　中村慎吾
「ひろしま山の歳時記」

著者紹介：一九三一年、比婆郡（現・庄原市）比和町に生まれる。農学博士（九州大学）。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」（シンセイアート出版）から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

ツルアリドウシ　冬でも青葉で真っ赤な実



木はすっかり葉を落とし、静まりかえっている林の中で、ツルアリドウシの真っ赤な実はとてもよく目立ちます。また、枯れずにみずみずしい緑色の葉を見ると、山に冬がほんとうに訪れているのだろうかと、疑いたくなるほどです。

ツルアリドウシの花が咲いたのは初夏、花が散ってからもう六ヵ月もたっているのに、真っ赤にうれた実はついたままです。それどころか深い雪の中でも実を落とさず、翌春、雪どけの頃にもまだ実をつけています。このようにとても長い間、実をつけてとうしているので、アリドウシというのは実が茎の先に「あり通し」ているということからアリドオシと言われるようになったという説があるようですが、ほんとうはアリドウシという植物の小枝には鋭くて細長いとげがあり、そのとげがアリをつきとうすほどという意味から名づけられたようです。

ツルアリドウシはアリドウシと同じなかまですが、茎にとげはありません。アリドウシは小さな低木です。見かけはアリドウシに似ていますが、ツルアリドウシは小さな草で、茎がつるのように地面をはっているのでツルアリドウシと名づけられたようです。

ツルアリドウシは実を長い間、落とさずつけているふしぎな植物ですが、ふしぎというと、北海道から九州までの山と韓国南部の山に分布しているツルアリドウシと同じ種類ではなかろうかとよく似ているアメリカツルアリドウシが遠く離れた北アメリカ東部に分布しているのです。どうして、アジアの東の一部と北アメリカの東部にツルアリドウシが生き続けているのか、深い謎です。アメリカでは真っ赤な実を長い間つけているので、観賞用に育てている人もいるそうです。

雪のつもる前や雪どけの頃、山を歩くと思わぬ発見があります。寒さに負けず発見を求めて野山に飛び出してみましょう。

比婆連峰のブナ林　深まりゆく秋の原生林

経（たて）もなく緯（ぬき）も定めず　少女（をとめ）らが織れる黄葉（もみち）に　霜な降りそね

これは萬葉集巻八に収められている大津皇子の歌です。美しく黄葉（も

みち）した山を、縦糸も横糸も定めず少女たちが織りあげた美しい布に見たててよまれた歌で、霜よこのうつくしい黄葉を枯らさないでと願う心がひしひしと伝わってくる名歌だと思います。

秋というと「もみじ狩り」のように、萬葉のむかしから秋のもみじは人びとの心をとらえて離さないものがあったようで、萬葉集には数多くのもみじをよんだ歌が収められており、今に伝えられています。

今、私たちはもみじに紅葉という漢字を当てていますが、萬葉のむかしは黄葉という漢字を用いています。もみじの当て字が黄葉から紅葉にかわったのは平安時代だそうです。どうして紅葉に変わったのか定かでありませんが、古代から中世へ移りかわる中で日本人の色彩感覚に変化が生じたのかも知れません。

比婆山連峰の麓（ふもと）に生まれた私にとって、ブナ林は自己の精神形成の基層に深くかかわっているように思えてなりません。秋、黄色に染まったブナ林はまさに萬葉集にいう「黄葉（もみち）」の世界、深まりゆくブナ林の秋に浸りながら、萬葉のむかしや古事記の世界に思いをはせ、みずからの自然観を培うとともに、森から生まれた文化を次の世代に語り継いでいきたいと思うこのごろです。

（写真はいずれも小川光明氏撮影）

※本誌第68号で紹介した内容を再掲載しています。

「つれづれ歌談」㊶

松岡 初枝

・世の中を憂しと恥（やさ）しと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば　山上憶良

世の中はつらい耐えがたいことだらけだが、飛んで行ってしまう訳にもいかないんだよ、鳥ではないからなあ…。貧窮問答歌の反歌としての一首ですが、人の世の悲哀は貧しさや別れ、特に死別となればひとしおでしょう。

・さしすみの栗栖（くるす）の小野の萩の花散らむ時にし行きて手向けむ　大伴旅人

栗栖の野に咲く萩の花、その花が散る頃行って神に捧げよう。立身出世して重い役についた旅人も、人生の終を迎える時の歌です。従二位大納言、六十七才で死去した酒好きの旅人。その旅人の部下が残した挽歌があります。

・かくのみにありけるものを萩の花咲きてありやと問ひし君はも　余明軍（よのみょうぐん）

もう亡くなってしまわれたのだ。萩の花は咲いているかい？とお尋ねになったあなたよ…。と主人の死を悲しみ惜しんだ歌です。

・梅の花いつは折らじといとはねど咲きの盛りは惜しきものなり　大伴書持（ふみもち）

梅の美しい花、咲き匂う盛りに折ってしまうのは惜しいものだ…。太宰府で行われた梅花の宴で詠まれた歌です。家持と書持は仲の良い兄弟で、二人は旅人の息子。層々たる歌人の多い大伴家ですが、とりわけ書持は家持が越中に任官する時に奈良山を越える所まで送ってくれ、再会を約束したのに先に逝った弟。

・かからむとかねて知りせば越の海荒磯の波を見せましものを　大伴家持

こんなことになるのを知っていたら、越中の海を見せたかったなあ…。と悲しむ家持です。

どの歌も強く心を強く打つもので、多くの人達が共感したことでしょう。

蝋管蓄音機

――現代御伽草子㊻

あきふゆひこ
亜木冬彦

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

「うん？」

茶髪に染めた坊主頭を動かして、宏樹が周囲に視線をやった。バスケットボールのアニメに影響されたのだというが、自分の若い頃を思い出して苦笑を浮かべた。小遣いを溜めたお金を握りしめて、町の美容室に行った。「オードリー・ヘプバーンの髪にしてください」。短くした髪は、まるで男のようだと兄に笑われて、大泣きしたことがある。

「水琴窟の音だよ」

「なんや、それ？」

「地中に埋めた瓶に水が落ちると、その音が反響して、こんな澄んできれいな音がするんだよ」

音が途切れないのは、水を循環させる装置を組み込んでいるのだろう。ここは郷土資料館、時代ごとの生活用品が展示されている。館長が大手家電メーカーの技術者だった人で、テレビやラジオ、ステレオやラジカセ、ビデオカメラ等々、家電のコレクションが充実している。故障したものも修理されて、実際に作動するのが凄い。

水琴窟の音が気に入ったのか、宏樹はしばらく耳を澄ませていた。

（誰に似たんだろう？）

百五十センチに満たないわたしに、こんな大きな孫ができるなんて。自分の父親の顔が浮かんだが、それは幼い頃の記憶だった。

大阪の高校で乱闘騒ぎを起こして、三ヵ月の停学処分を受けた。家でくすぶっていてもろくなことはないと、わたしが預かることにした。

ガラスの格子戸を開けて、中に入った。いくぶん様変わりはしているが、懐かしい場所だ。昔は地元の小学校の校舎で、かじかんだ手で雑巾がけした廊下もそのまま残っている。

「よくお出でになりました」

館長自らが出迎えてくれた。ふくやかで穏やかな物腰は、わたしの小学校の恩師に似ている。

「今日は、孫を連れて来ました。よろしくお願いします」

宏樹が顎を突き出すようにして会釈した。両手はポケットに突っ込んだままだ。

「せっかくですから、一通り、見ていただきましょうか」

蓄音機が展示してある部屋に案内してもらった。

「これが、最初の蓄音機です。エジソンによって発明されたもので、レコード盤ではなく、この円筒の表面を覆っている蝋に音を刻んでいます。蝋は表面を削ることで、何度も繰り返し録音することができます」

蝋管式の蓄音機の実物を見るのは初めてだった。

「次に開発されたのがレコード盤の蓄音機です。これで音が格段に良くなりました。蓄音機は、今のステレオのように音を電気信号に替えて増幅していない自然の音なんです。その音を大きくしてくれるのがこのラッパです」

何か聴いてみましょうと言われて、宏樹が選んだのが小林明のレコードだった。テレビの深夜放送で、渡り鳥シリーズの映画を見たのだという。突き抜けるような小林明の高い声が響いた。ダンチョネ節だった。

「すげえ……」

宏樹の声に、館長が満足そうに頷いた。

ラッパの機能が木函（きばこ）に組み込まれているラッパ内蔵型、組み立て式のポータブル型、まるで家具のような大きさの床置き型、いろんな蓄音機を解説してもらった。

「では、お父さんの蝋管を再生してみましょうか」

そう言われて、わたしは手提げバッグから、円筒型の紙箱を取り出した。表面にエジソンの顔写真が印刷され、「EDISON GOLD MOULDED RECORDS」の文字が読み取れる。父親の寛治の戦友だった木村さんが持参したものだった。

太平洋戦争末期、寛治たちの所属する部隊がマニラ港経由でシンガポールに上陸。二人は物資の補給で、中国人の華僑が経営する店に入った。そこで蝋管式の蓄音機を見つけた。半世紀も前に製造されたもので、当時でも骨董品の扱いだった。

録音機能もあることを知って、試してみようと言ったのは寛治の方だった。それで、お互いの声を録音した。その蝋管を交換して「もしものことがあったらよろしく頼む」と約束を交わしたのだという。その三日後、部隊は激戦地であるビルマの地に向かった――。

音を再生する方法もわからないまま、父親の蝋管は仏壇の奥にしまい込まれていた。一度だけわたしが電気屋に相談してみようかと提案したことがあるのだが、「お父さん、照れ屋だから、大したことは言ってないよ」と母親は笑って取り合わなかった。

郷土資料館での「蓄音機展」のチラシを見て、ひょっとしたらと問い合わせた。蝋管式の蓄音機の写真が載っていたのである。

館長が、紙箱から取り出した黒色の円筒を、蓄音機に慎重にセットした。函に差し込んだハンドルを回してゼンマイを巻く。

「蝋管が傷んでいて、音が出ない可能性もありますからね」

そう前置きして、蓄音機のスイッチを入れた。蝋管が回転を始め、歌口と呼ばれる円盤状のサウンドボックスに取り付けられた針が蝋管の表面に当たるように調節する。

「この歌口の内部にある振動板が針の振動を空気振動に変換して、音として放射するんです」。

「ジジジジジ……」

函の中のラッパから、雑音が聞こえてきた。

（やっぱり、無理なのか……）

「新米はどうだった……」

ぐぐもった音だったが、確かに父親の声だと思った。しばらく待ったが、また雑音が聞こえるだけだった。

「……うちの米はうまい……」

聞き取れたのはそれだけだった。

（最期の言葉が新米の心配……）

腹立たしかった。家族に対する言葉もあったのだろうが、蝋管が傷んで消えてしまった……、そう思おうとしても、がっかりしている自分がいる。

「ひいじいちゃんの言う通りや」

隣を歩く宏樹が急に口を開いた。

「ばあちゃんの炊いてくれた米は最高や。わし、あんなにうまい飯、食うたことがないでー」

新米だからだ。うちで取れた新米を食べさせたかったのも、宏樹を呼び寄せた理由の一つだった。

「わしじゃあ駄目かな。わしがばあちゃんを手伝うても、もう米作りは無理なんかな？」

電話を聞いていたのだ。来年の田んぼについて、本家の従兄弟に相談した。いくら地域の援助を受けていても、一人で田畑を切り盛りするのはもう年齢的にも限界だった。

「うちの米はうまい」

父親の声が聞こえた。涙が溢れだした。

まちの古本屋さん
どら書房
古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

・無料本、百円本、50 円本などのコーナー。
　無料の漫画ルームもあります。（ただ今閉鎖中）
・地元の絵葉書、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
※九日市の開催日は定休日でも開店します。

●庄原市中本町 2-1-10　●定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
●TEL: 090(9913)3052　●営業時間 9:30 ～ 18:30
※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

特別連載㉖

「旧暦」のカレンダーを見る

古川 行洋

第二部　歴史事項を見る

十一月四日 安政東海大地震 安政元（一八五四）年

駿河、遠江（とおとうみ）、伊豆、相模に大地震があり死者一万人に達した。翌年には伊勢湾一帯に大地震があり、倒壊家屋一万戸、東海道の交通が途絶した。ロシアのデイアナ号が丁度この日、下田港に入って間もなくこの地震に見舞われた。大津波が襲い、後部竜骨をもぎとられる致命的な大損傷を受けた。

十一月九日 改暦の詔勅 明治五（一八七二）年

明治四年から六年頃にかけて、明治政府はさまざまな大改革を断行した。鉄道の開通、郵便の創始、徴兵制の実施、地租の改正、学制の改革などである。その中で、国民をもっとも驚かせたものが、太陰太陽暦の天保暦（旧暦）を廃して、今日我々が使っている太陽暦（新暦）としたことである。そのショックと混乱は、まさに筆舌につくしがたいほどであった。

当時、十月一日になると、翌年の暦が発行され、人々は我先にこの暦を買い求めたのである。というのは、旧暦においては、毎年大の月（三十日）と小の月（二十九日）の配列がことなり、しかも二、三年ごとに閏月というものがあって、一年が十二ヵ月になったり十三ヵ月になったりする。そのために人々は、できるだけ早く来年の暦に手を入れ、いろいろな計画を立てる必要に迫られていたのである。

明治五年の冬も、例年のように、全国四十数軒の暦屋から、政府編纂の暦が売り出されたが、明治六年は閏月（十三カ月）が予想されていたので、例年より売れ行きはすばらしくよかった。ところが、十一月九日になると、突如改暦の詔書と太政官布告が発表されたのである。

「太政官布告第三三七号

詔書

朕惟（ちんおも）フニ我国通行の暦タル、太陰ノ朔望ヲ以テ月ヲ立テ、太陽ノ躔度（てんど、太陽の軌道上の運動のこと）ニ合ス。故ニ二、三年間必ズ閏月ヲ置カザルヲ得ズ。置閏ノ前後時ニ季候ノ早晩アリ、終ニ推歩ノ差ヲ生ズルニ至ル。殊ニ中下段ニ掲ル所ノ如キハ、率（おおむ）ネ妄誕無稽（もうたんむけい、でたらめでよりどころがない）ニ属シ、人知ノ開達ヲ妨ルモノ少シトセズ。

蓋（けだ）シ太陽暦ハ太陽ノ躔度ニ従テ月ヲ立ツ。日子多少ノ異アリト雖（いえど）モ、季候早晩ノ変ナク、四歳毎ニ一日ノ閏ヲ置キ、七千年ノ後、僅（わずか）ニ一日ノ差ヲ生ズルニ過ギズ。之ヲ太陰暦ニ比スレバ最モ精密ニシテ、其便・不便モ固（もとよ）リ論ヲ俟（ま）タザルナリ。依（よっ）テ自今旧暦ヲ廃シ、太陽暦ヲ用ヒ、天下永世之ヲ遵行（じゅんこう）セシメン。百官有司其レ斯旨（このむね）ヲ体セヨ。

明治五年壬申十一月九日」

この詔書の意味するところは、次の2点である。

一、今般太陰暦ヲ廃シ太陽暦御頒行（はんこう）相成候に付来ル十二月三日ヲ以テ、明治六年一月一日ト被定候（さだめられそうろう）事。

一、一ヶ年三百六十五日ヲ十二ヵ月ニ分チ、四年毎ニ一日ノ閏ヲ置候事。

十一月二十三日 宝永富士山大噴火 宝永四（一七〇七）年

富士山の須走口から噴火し、関東一円に灰を降らした。江戸では昼間でも行灯をつけ、道ゆく人は笠と合羽を着て降灰をよける始末。二十八日になって噴火は静になった。この爆発によって出来たのが宝永山である。

（画像は宝永大噴火を描いた絵図「夜ルの景気」）

シニア海外ボランティア・エピソード⑪

「クオンボカ祭りツアー バスの遅刻等、問題山積」

山崎 允（まこと）

クオンボカ祭りの艀（はしけ）による大移動。凄い！　一艘につき百人を優に越す漕ぎ手の櫂（かい）を操る褐色の筋肉が、汗と水しぶきで夕陽に踊っている。

王宮への水路を挟んで見守る観衆の怒涛のような歓声の中、王様の、お后様の、付き人達の、十数艘の艀が入港して来た。その船団の前を、2隻の“露払い艀”が王様たちの水路の両サイドを滑るようにやって来て、また引き返して行った。これは「王様の艀がやって来るぞ！」と聴衆に報せ、通路が安全かと確かめているセレモニーなのだ。

王様の艀には、張りぼての等身大の象が黒光りしていた。漕ぎ手（パドラー）たちのいでたちは、ヒョウの皮、赤いベレー帽、ライオンのたてがみで飾られたまわしを付けている。

日本人観光客22名（ＪＩＣＡスタッフ、企業の駐在員及びその家族）、うち1名は、参加を募集する広告を見て、わざわざ日本から来られた方。首都ルサカの外国大使館にも宣伝した結果、3名のノルウェー人が加わり合計25名になった。

王様の計らいで、遅れて到着したにもかかわらず、船着き場の特等席に案内された。早くから陣取りしていた他の観客に申し訳ないほどの歓待ぶりだった。この祭のために、この瞬間のために、2年間を要したのだと思うと体の中から力が「フー」と抜けていくように感じられた。

この水の氾濫は、この地に肥沃な土壌と魚「ブリーム」を運んで来てくれる。フナと石鯛を足して2で割ったような魚で、干物にしてトマトと共に煮込むか油で揚げるかしてみんながよく食べている。私はこの魚の臭いがきつくて、煮ても焼いても受け付けられなかった。8か国に囲まれた内陸国の魚ブリームは「クオンボカ祭り」が連れてくる王様たちへのプレゼントでもある。

今回のツアーは、バスやホテルの手配等を担当する旅行業者で専門学校（カウンターパートは学校の教頭）と一月も前から打ち合わせを重ねていた。それにもかかわらず、出発当日、1時間も遅れてバスが到着。私の胸中は「活火山状態！」だが、噴火を我慢して出発したが、走りがおかしい。バスのギアが「ロー」から「セカンド」にチェンジするが、「トップ」に切り替えないで走っている。後でわかったことだが、車庫でバスを修理していたが、走行には支障がないのでそのまま来たのだという。結局全行程を「セカンド」のままで走り通した。

3日目の朝食の手配、食堂に従業員もカウンターパートも来ていない。私は彼の部屋に直行してドアを叩いた。食堂に集まったお客様も状況を察して、自分で皿、ナイフ、フォークをテーブルに運んでいる。従業員の兄ちゃんが寝ぼけまなこでやって来た。どうにか食事が始まると、私はその従業員とカウンターパート（彼は観光省に所属する40歳半ばの国家公務員）を起立させてお詫びの言葉を述べさせた。

旅の安全をとわざわざツーリスト・ポリスまで同行させてくれた観光省（日本では国土交通省）への報告レポートで、こうした反省点を書かなければならないと思うと気が重くなる。しかし、今後の観光業務を促進するためには、国を挙げて旅行専門学校などで、従業員となる若者の教育をすべきだと提言するのは重要なことだと思う。

首都ルサカに帰るバスの中、旅行専門学校から参加させて、ガイドの実習をさせたチャバラ嬢が終始お客様に愛嬌を振りまきながら案内して喜んでもらっていたのが、せめての救いだった。

どらくろ俳壇＆歌壇

※参加を歓迎します。

葬ありて稲刈り休む棚田村　近藤 昌平

病灯の消ゆる秋の闇　冨久 光

あちこちに金木犀の香りけり　片岡 正人

木の葉船行きて帰るところなし　隆愚

配られし反射タスキや敬老日　大槇 三代子

老いらくの願いの糸や星祭　寺内 龍二

おくる人おくられる人秋の暮　赤川 冬人

庄原とふ地を踏みもみで　松岡 初枝

庄原に縁（えにし）をもてしどらくろあやよし

投稿＆寄稿

候のことば

「立冬（りっとう）」

隆愚

立冬とは、冬の気配が山にも里にも感じられてくる頃のこと。今年は十一月八日です。この頃、先ず「木枯らし」が冬の使者としてやってきます。字の通り、葉を吹き散らし、木を枯らしてしまう風。「凩」とも書きますが、こちらは国字。日本人が作った漢字です。木に吹き付ける風のイメージ、そういえば木枯らしの事を「木の葉颪（おろし）」「木の葉落し」ともいいます。

これが樹木達の冬支度。葉を落とすのは消耗を少なくし、出来るだけ負担がかからない様にするため。その前に、ちゃんと冬を越すための「冬芽」を用意しています。冬芽は、厚い殻や毛で覆われていて、じっと春を待つのです。

「僕と一本杉」

冨久 光

僕の畑の入口に見事な一本杉が育っている
僕が生れた八十五年前、父が植えた一本杉である
今では周囲を圧する勢いで垂直に育っている
時は無雑作に過ぎていくが生命の全てを包含して
ひたすら黙々と生きている
僕には座る程のゆとりもない居場所すらない
不確かな人生の真只中に放擲されている
僕にとって一本杉は唯一の凝縮された時の断面に過ぎない

「蓄音機」

赤川仁洋

庄原口和郷土資料館で開催された「蓄音機展」に、どら書房にあった蓄音機も陳列された。振り子時計の下に置いていたものを寄贈。そして、蓄音機展で再会したのだが、表面の傷がきれいになって、ちゃんとレコードが聴けるのには感激。修理にはかなり時間がかかったらしい。函の下部に貼られた小さなプレートがユニークで、海外の地名と店名が刻まれていると教えてもらった。

マレーシアの州都であるジョホールバルが日本帝国の占領下であったとき、日本から輸出された蓄音機が華僑の店で売られ、それがまた日本に持ち帰られた……。この蓄音機が話せるのであれば、その数奇な運命をじっくり聞いてみたいものだ。

遠方からの来客に、おもしろい場所はありませんかと訊かれたら、真っ先に口和資料館の名前を上げる。蓄音機の他にもテレビ等の時系列のコレクションがすばらしい。とくに、昭和好きの方にお薦めである。

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載しているので、ダウンロードしてお楽しみいただけます。

http://shobara.wix.com/dorakuroa

「庄原を想う会」主催の交流会

「気軽に庄原について話し、仲間の輪を広げよう」

日時：12月16日（土）13：30～15：30

テーマ：「峰田の黒文字茶で、地域活性化を！！」

講師：矢倉義昭氏
（庄原黒文字の郷代表）

場所：生活交流館１
（備後庄原駅隣接）

参加費：500円
（学生 200円、お茶菓子代込み）

申込み＆問合せ：080-3631-9125（やない）

手仕事の仲間たち作品展

日時：11月4日（土）、5日（日）10：00～16：00
場所：庄原ショッピングセンタージョイフル２階

《出店者一覧》
・かなや（和小物）・人形のふーさん・我楽（和雑貨）
・ギャラリー創美（帽子）・生駒（寄せ植）
・くららおばさん（羊毛フェルト）・昌子織（さをり）
・お福（着物＆古布）・ちくちくはうす玉手箱（着物リメイク）
主催＆問合せ：宍戸（080-1906-3391）

「旧暦カレンダー」（販売価格：1,650円）

・日本の自然に根差した暦（こよみ）です。
・太陽暦でも太陰暦でもない、「太陰太陽暦」です。
・新暦（太陽暦）も併記しているので便利です。
・季節の行事や呼び名の意味が、より深く理解できます。
・自然災害の予測ができます。

どら書房にて令和６年版 予約受付中！
※本誌特別連載の古川行洋氏推奨。

編集後記

◇先月号の当欄で残暑のことを書いたのですが、今はもう朝晩の冷え込みが厳しくて、我が家はコタツを出しています。気温の変化についていけず、体調を崩す人が多い……、わたしも鼻をグズグズしながら原稿を書いています（苦笑）。

◇木次線ストロール、岡山に続いて、２県目の県境越えです。列車だとあっという間の島根・奥出雲入りですが、歩いて広島県に戻るときは、道路標識もあるのでしばし感慨に浸ることができます。

◇ウクライナに続いてパレスチナの戦火、これが人間の本質？　平和ボケした頭でも、無力でも、しっかり考えねば。対岸の火事ではないのです。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090（9913）3052（赤川）
e-mail：touzin@nifty.com

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

第266回　　くんちいち

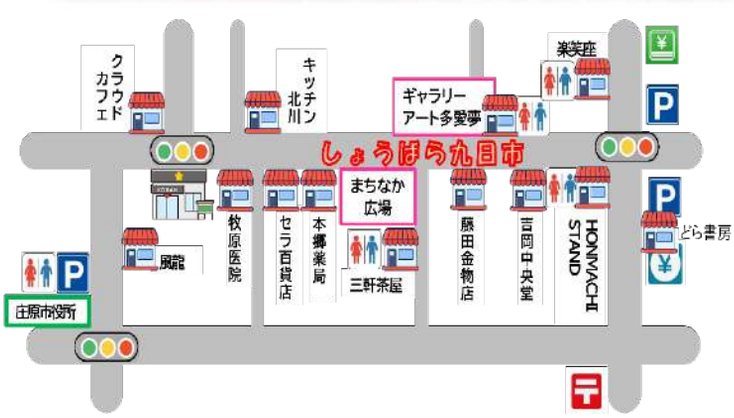
しょうばら九日市

出店予定一覧（順不同）

- 文屋
- 郷屋
- ぬくもり
- ちくちくはうす玉手箱
- クラフトショップ
- くららおばさん
- 工房アム
- 農楽会
- 二八そば加工所
- とらぢ
- 健康企画グループ
- さだっさ
- 里山キッチンほっぺ
- 久代水産
- くんえん工房　香豚
- 克国水産
- 田崎屋
- 宮川屋
- 和み屋
- どんぐりーず
- てしごと比和
- アーミッシュ
- ふくふく牧場
- １７KICHEN
- かぐや姫
- 土遊び布遊び
- 地域家族まなび場三軒茶屋
- 寄能商店
- ユタカコーヒー

11月9日(水)

9:00～13:00



TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
11月8日(水)～10日(金) 10時～15時
キルト向日葵作品展

★小学生による九日市関連イベントあり！

★風龍→九日市スペシャルで餃子200円！
★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き
★カフェクラウド→タピオカドリンク100円引き
九日市特製ピタサンド600円
★どら書房→休憩室(漫画ルーム)あります！

＊出店申込みは、【毎月２０日締切】　コンパネ１枚スペース１，２００円～
九日市愛好会事務局　TEL/FAX(０８２４)７２－８２８５
〒７２７-００１３　庄原市西本町２-１-１０（楽笑座内）

【ホームページ】
http:www.kunchi-ichi.jp